



# KISS<sup>®</sup>

JAPAN TOUR 1968

AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1988

# KISS®

キッス

日本公演

**4月16日 名古屋 名古屋市公会堂**

主催●中部日本放送

**4月18日 大阪 大阪城ホール**

主催●読売テレビ放送/ウドー音楽事務所

**4月20日 横浜 横浜文化体育館**

主催●ウドー横浜/T VKテレビ

**4月21日 東京 武道館大ホール**

**4月22日 東京 武道館大ホール**

**4月24日 東京 代々木オリンピックプール**

主催●文化放送/ウドー音楽事務所

招聘●ウドー音楽事務所

協力●ポリスター・レコード

PHOTOS by NEIL ZLOZOWER  
ROSS HALFIN  
MARK WEISS

DESIGN by INDEX  
PRINTING by L.D.KIKAKU





## トップ・バンドとしての誇りを保ち続け、君臨するキッス

伊藤政則

MASA ITO

エアロスミスの劇的な復活によって、70年代の古典的ロック・バンドに対する再認識の動きが強まってきている。70年代後期に活躍したA/C/D/Cにまで強烈なスポットライトが当てられている現状を見ると、現在、最前線で活動している若手ハード・ロック・バンドの基本となる、いわゆる原点回帰願望の流れをそこに読み取ることができるといえる。

このバンドも影響を受けたアーティストの横波を入門編とし、その骨組みの上に独自の筋肉を形成していく。それが個性となり、バンドの色合いとなっていくのだが、心の片隅には誰に対しても憧れとコンプレックスが消えることのない刻印として、しっかりと残されているものだ。ジョン・ボン・ジョヴィが記念すべき「モンスターズ・オブ・ロック」の大舞台にキッスのポール・スタレーを招待したり、あるいはエアロスミスのショーに飛び入りした事実は、その精神の強さを象徴するエピソードとなった。

10年振り3度目の来日公演を決めたキッスは、70年代のアメリカン・ロックン・ロールの記録を次々に塗り変えながら、ハード・ロック・バンドがアイドルとして成立する新イデオロギーを確立させた。英米の熱狂ぶりに優るとも劣らない歓迎の旗を掲げた日本のマーケティングも、キッスに酔い、キッスに躍り、キッスに対し最大級の敬意を表したのである。あらゆる雑誌がキッスを追いかけ、NHKはキッスのライブを特集して全国のフ라운管にショッキングな映像を送り込んだのである。メイクとあの過激な衣装でジャンボ機から降りてくる姿は、遠い惑星からの使者のように映ったし、税関の人しか素顔を知らないという噂が電報ゲームの如くファンの間を飛び回り、空港から都内までキッスを追いかけるテレビ局が出現するに至って、日本中がパニックの大きな渦に飲み込まれたような錯覚に陥った。

キッスは確かに異星人だった。彼らが求めたロック・コンサートは、夢とロマンが凝縮した移動サーカスのパフォーマンスで、従来のロック・コンサートの概念を根底から覆す画期的な発想で構成されていたのである。立体的ステージ、シアトリカル・ギミック、そしてサイコロラマ的演出……。キッスは観客の求めるすべての夢をステージ上で華麗に表現してみせたのである。

夢物語の誘い水としての役割で考え出された仮面(メイク)は、あらゆる側面からキッスというバンドをサポートし、当初の目的をすべて遂行させてしまう。素顔に戻ったキッスは新たな歴

史を創造すべく、バンドの第2章に続く道を歩み始めたのである。

ハード・ロックにポップな感性を持ち込み、わかりやすいロックを供給し続けたキッスの実績はキラリと光っている。しかも、10数年間に渡りトップの座を死守しなから、その至高のエネルギーと影響力を保ち続けたことは、多くのミュージシャンが尊敬のまなざしを送っているポイントでもある。ジーン・シモンズは昨年8月ロンドンでこう語っている。

「一発のヒット・アルバムを出すよりも、長い間トップ・バンドでいることの方が難しい。しかし、キッスはそれを実現している」と。

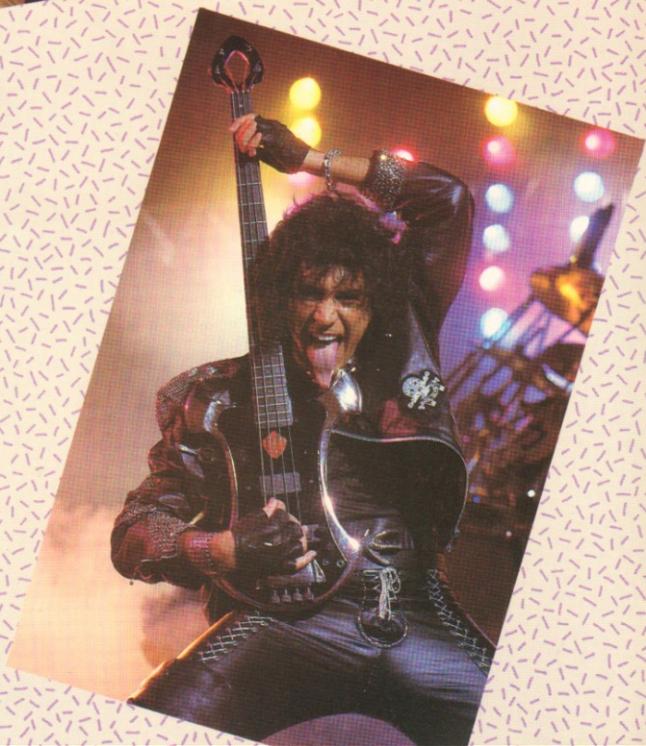
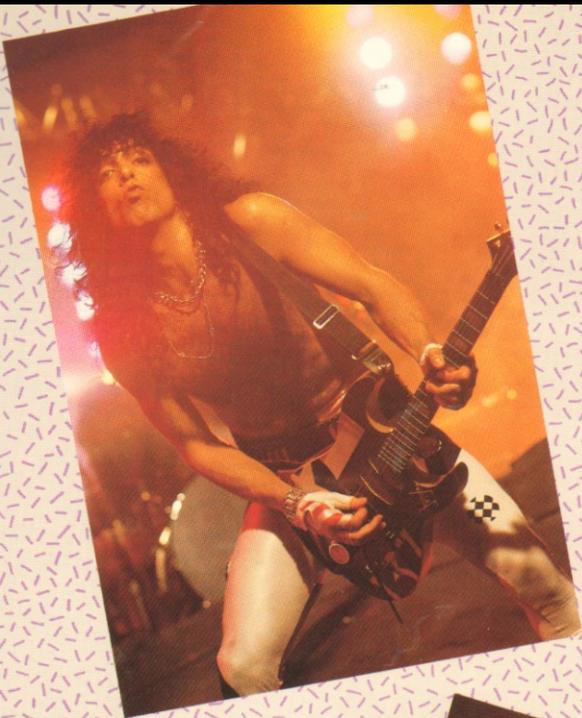
続々と誕生する若手バンドのミリオン・セラー・アルバムを皮肉ったような台詞だが、確かにその通りなのである。時代の誘惑にも負けずに、信じる音楽を頑固に貫き通し、その上でトップ・バンドであり続けることは本当に難しい。その点、キッスは過去もそして現在もトップ・バンドとしての誇りを保ち続けている。10数年前の名曲「ラヴ・ガン」をオープニング・ナンバーに持ってきた全米ツアーでも、彼らは自信に満ちた顔でキッスの長い歴史の断片を披露し、さらには、新しい歴史を告げる新作「Crazy Nights」からのナンバーを堂々と演奏したという。

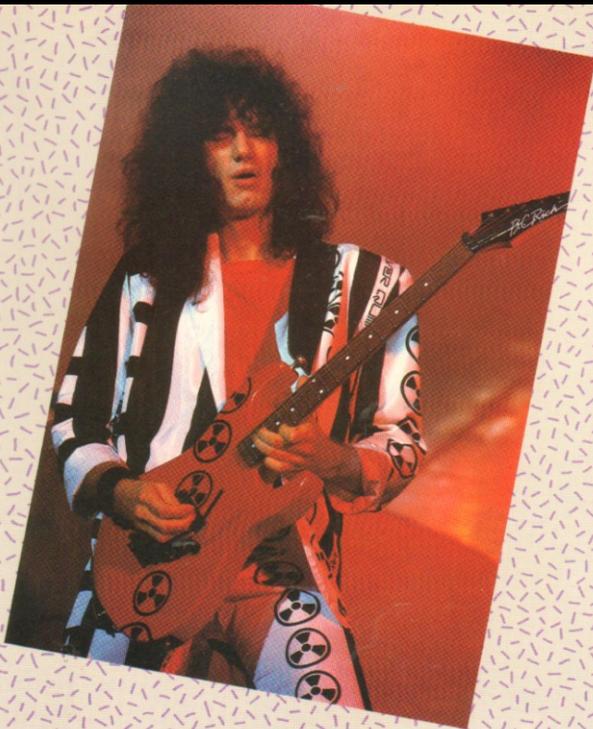
キッスの出現以来、彼らの装飾の部分だけを過大模写したバンドが増えている。化粧をし、派手な仕掛けと目もくらむばかりのライティング……。ところが、ジーン・シモンズが言うように「内容が伴っていない」バンドが多過ぎる。高度な音楽性を持ち、その音楽をより楽しんでもらうために考え出した装飾が、全く次元の違う形で使われ始めたのである……。

これから始まるキッスのショーをじっくりと見てもらいたい。あるいは10年前の想い出と現在をシンクロさせるだろうし、また新世代のファンはそのパフォーマンスの圧倒的な破壊力を驚かすだろう。しかし、ショーを見終わった後で、誰もエンターテインメントの基本とその意義を正確に理解してくれるに違いない。ロック・コンサートをショーからエンターテインメントに見事に変換させたキッスの姿は、近代ハード・ロックのあらゆる要素の凝縮だからである。

すべてはキッスから始まった。10年振りそれを再確認する。武者震いがする……。









## PAUL STANLEY

ポール・スタンレー (Vocals, Guitar)

1952年1月20日生まれ/ニューヨークのクイーンズ出身。00年代後半からバンド活動をしていた彼は、ジーン・シモンズとの出会いをきっかけにふたりで新バンドの結成を決意。ローリング・ストーン誌でみつけたピーター・クリスの“バンド/メンバー募集”の広告を通じて彼らはお互いに接近し、3人でキッスを結成する。それからまもなくN.Y.の情報紙“ヴィレッジ・ヴォイス”に出したギタリスト募集の広告によって、エース・フレアリーを獲得し、この4人でキッスが正式にスタートしたのは72年のことである。

N.Y.のハイスクール・オブ・ミュージック・アンド・アート時代には、すでに近所の友人たちとバンドを組んで演奏活動をしていたという。そのN.Y.のクラブ・シーンで演奏活動をしていた頃は、もっぱらギタリストとして活躍していたらしい。キッスでの活動においてはフロントマンとして、またヴォーカリストとしてのイメージが強いポールだが、ギタリストとしてはもちろん、ソングライターとしてもバンドに貢献していて、最近では『暗黒の神話』(82年)や『アニマライズ』(84年)、『アサイラム』(85年)のプロデュースも手がけるなど、まさに八面六臂の大活躍である。(落合 隆)





## GENE SIMMONS

ジーン・シモンズ(Bass, Vocals)

1949年8月25日生まれ/イスラエル出身。イスラエルで生まれた彼は、まもなくニューヨークのブルックリン、そしてクイーンズに移住。大学卒業後は、小学校の教師をしていたこともあるという。また、「ヴォーグ」誌の編集者として音楽コラムを担当していたこともあるというユニークな経歴を持つジーンだが、彼もまた80年代後半から本格的な音楽活動をスタート。70年には友人の紹介でポール・スタンレーと知り合い、ふたりでヴィキッド・レスター（当初はレインボーと名のっていたらしい）なるバンドを組んで、演奏活動をしていたこともあるという。ちなみにそのヴィキッド・レスターのメンバーのなかにはブルース・キューリックの実兄ボブ・キューリックや現トワイステッド・シスターのJ.J.フレンチもいたらしい。

キッズきってのエンターテイナーである彼は、俳優としても有名で、出演作には「未来警察」('84年)や「ハロウィン1988・地獄のロック&ローラー」('86年)がある。また、プロデューサーとしても大活躍中で、バンドの「アサイラム」('85年)などをポールとともに手がけているほか、キールやブラック・アンド・ブルーなどの作品をプロデュースしている。

(落合 隆)





## ERIC CARR

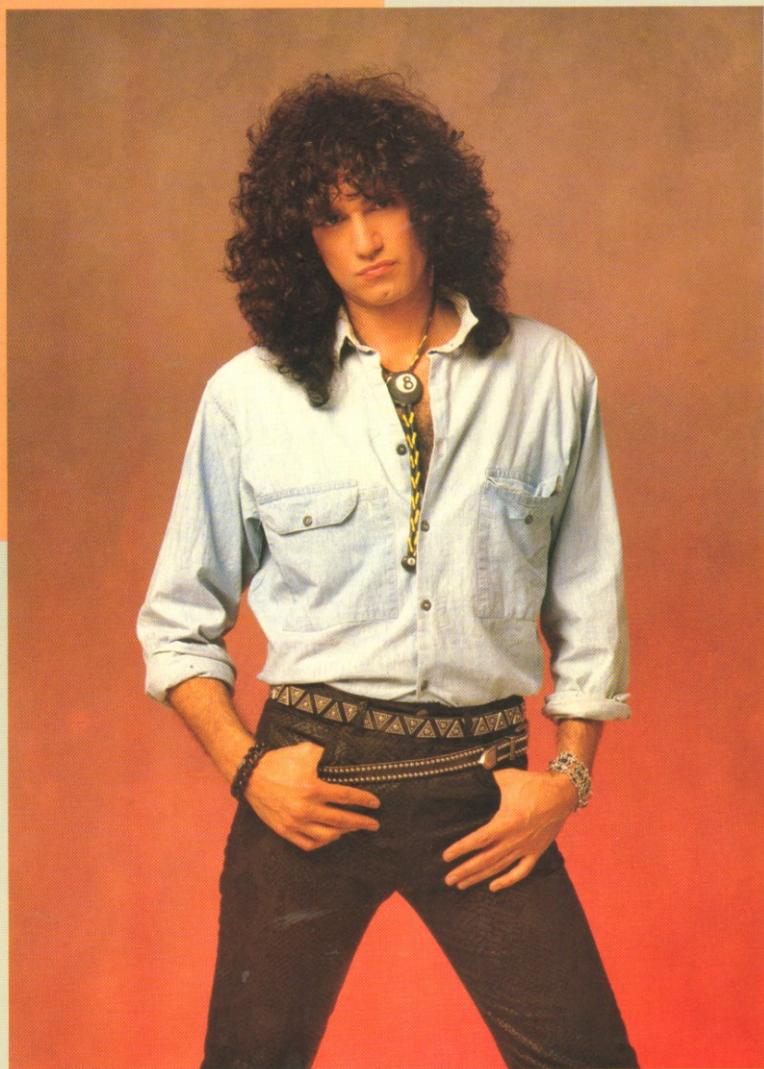
エリック・カー (Drums)

1953年7月12日生まれ/ニューヨークのブルックリン出身。  
'80年発表の『仮面の正体』を最後にバンドを脱退したピーター・クリスの後任として、同年7月にキッスに加入。翌'81年発表のキッスとしては初のトータル・コンセプト・アルバム『魔界大決戦』がエリック加入後のバンドの第1弾となった。

幼い頃はビートルズが大好きだったという彼は、リンゴ・スターに憧れてドラマーを目指すようになったという。やがて親戚からドラム・セットをプレゼントされたのかきっかけで、10代前半の頃から本格的にドラムをプレイはじめて、ロック・ミュージシャンを志すようになったという。キッスでの活動以前は、もっぱらバブ・バンドのメンバーとして、クラブやバーで演奏活動をしていらした。当時はトップ40ヒットのコビーが中心で、そうしたバブ・バンドでの活動が約15年くらい続いたという。'80年5月になってピーター・クリスの脱退が発表されると、エリックはバンドに接近し、オーディションを経てキッスの正式なメンバーとなった。いまではポールやジーンに続くキッスの第三の男としてすっかりおなじみの存在で、ソングライターとしてもバンドに貢献している。

(落合 隆)





## BRUCE KULICK

ブルース・キューリック(Guitar)

1953年12月12日生まれ／ニューヨークのブルックリン出身。84年秋のヨーロッパ・ツアー中に病気(Reiters Syndrome)で倒れたマーク・セント・ジョンの代役としてキッスに参加。しかし、マークの容態がいつごろ回復しないことから、同年12月に正式にキッスのメンバーとなった。エース・フレリー、ヴィニー・ヴィンセント、そしてマーク・セント・ジョンに続くキッスの四代目ギタリストである。

ブルースは、かつてバランスやミートローフのバンドで活躍していたギタリスト、ポップ・キューリックの実弟。元ポップの影響もあって、10代前半の頃からギターを弾いていたという。やがてジョージ・マックレーやミートローフのツアーに同行するなど、本格的な音楽活動をスタート。70年代後半にはマイケル・ポルトンらとともにブラックジャックなるバンドを結成するが、わずか「BlackJack」(79年)と「Worlds Apart」(80年)のアルバム2枚の短命に終わった。そのブラックジャックでの活動を経てN.Y.の伝説的なバンド、グッド・ラッツに加わり、彼らの「Great American Music」(81年)にも参加しているが、その後はN.Y.周辺で独自の活動をしていた。

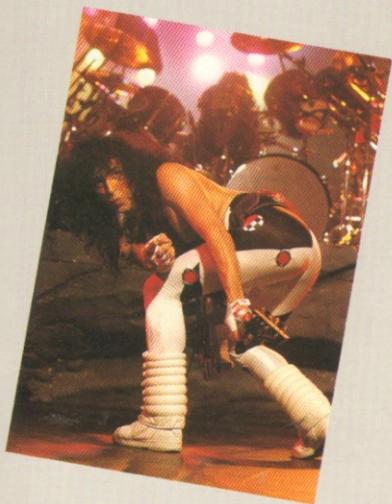
(落合 隆)



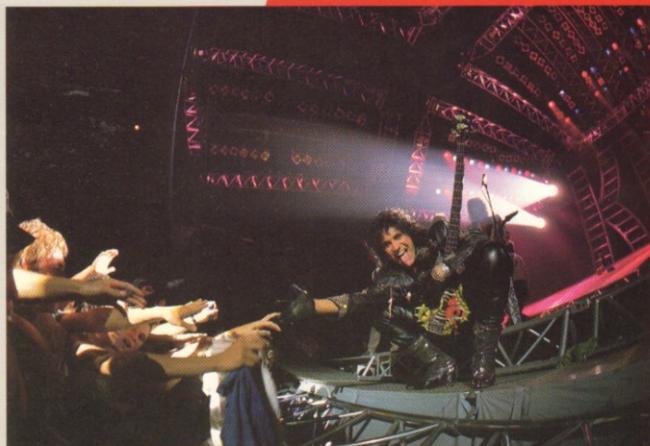








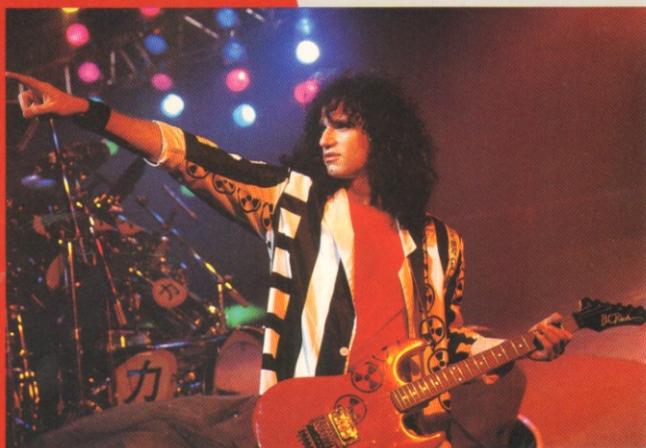
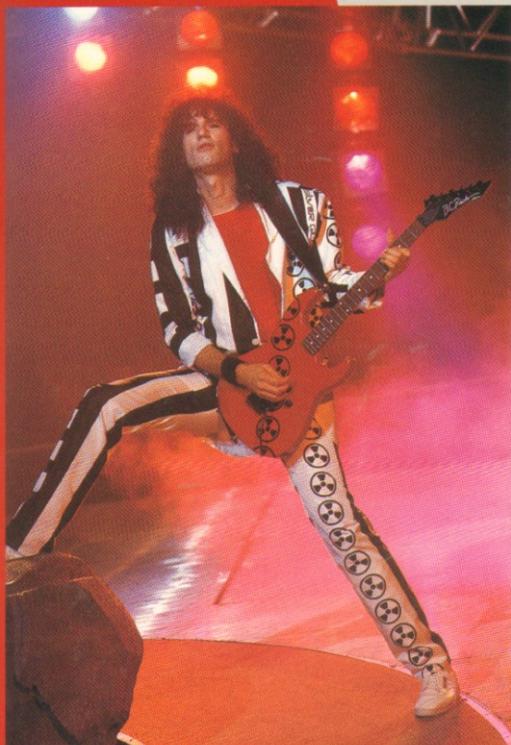


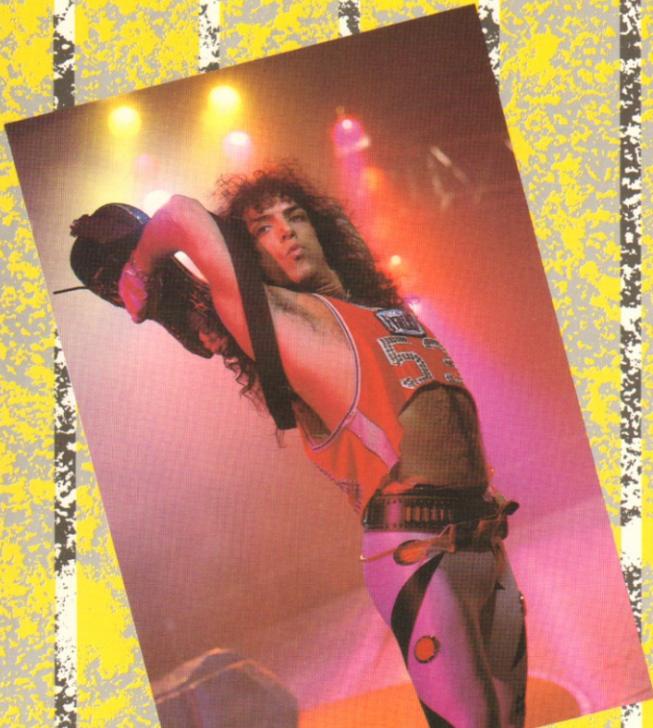
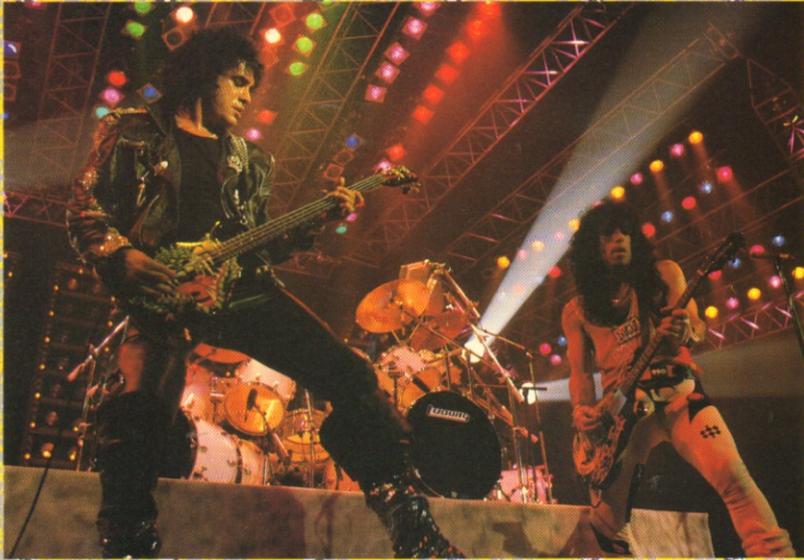


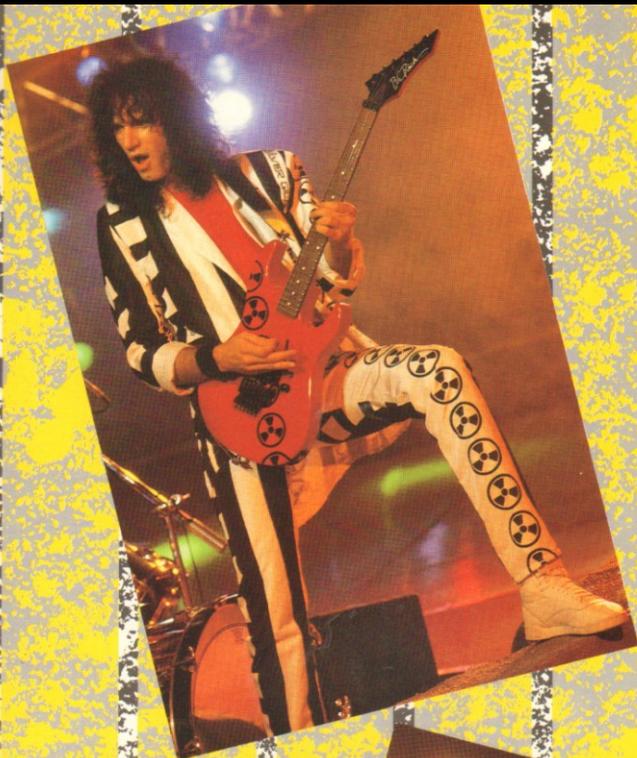


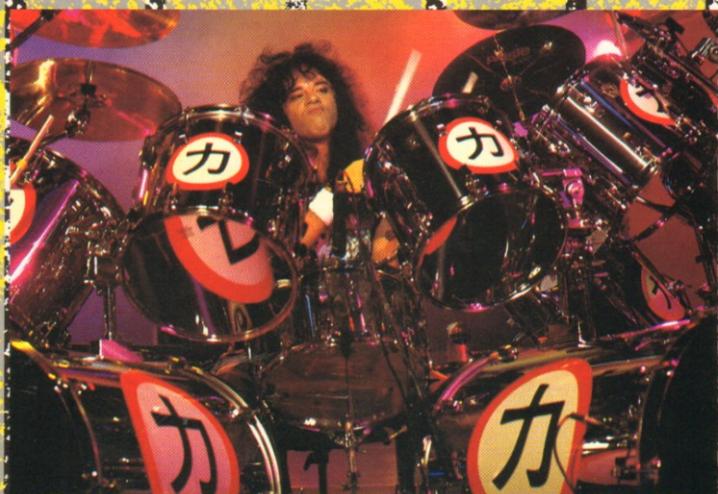












## 常に最高のロック・ショウを展開するキッス

増田勇一(BURRN!)

YOUICHI MASUDA

何て言ったらいいんだろう。僕はいまだに KISS の来日を、どういふ顔をして待っていたらいいのか、わからずにいるのだ。「実感がわかない」というヤツなのかもしれないし、心のどこかに「何だかんだ言ったって、どうせ来やしななんだから」といったアキラメの気持があったからなのかもしれない。とにかく「どうしたらいいのかわからない」のだ。

'86年2月、どうしても KISS が観たくて僕はアメリカに飛んだ。幸運にもラスヴェガス、サンバーナティーン、サンディエゴの3カ所での「ASYLUM TOUR」のステージを観ることが出来た。この時のコンサートは、過去2回の来日公演とは違った意味——つまり、現在の KISS の実像をとらえることが出来た、という意味で感動的だったし、ステージの後方でまはやく巨大な電飾ロゴや、花火などの仕掛けの凄さもさることながら、その内容の充実ぶりには、もう圧倒されるしかなかった。ホール・スタンレーやジーン・シモンズの力量の大きさは勿論だが、日本のファンにとっては「未だ見ぬ大物」ともいへるエリック・カーとブルース・キューリックの技量も、それに優るとも劣らないものなのだ。しかも、技術的には本当に凄いことをやっていたから、ステージ上の4人は、「ロック・エンターテインメントに徹しているようにしか見えなない」のだ。技術とエンターテインメントの、どちらか1つが欠けても KISS のスタイルは成り立たないわけだが、どうあれ、他のバンドには絶対に真似の出来ないことだろう。

今だからこそ、こんなに冷静な文章を書いていられるが、ショウの最中は文字どおり我を忘れていた。「Rock And Roll All Nite」の大合唱が起こった時には、思わず武道館での記憶がフラッシュバックしてしまったり、「We Want KISS!」のコールの渦に巻き込まれた時、これ以上のロック・ショウはあり得ない、と確信した。

そして、その時に初めてジーン・シモンズにインタビューした。テレコを持つ手が震えた。そんな僕に向かって彼は言ったのだ。

「夏には日本に行けると思う。武道館でまた会おう」

しかし、御存知のとおり、その約束は果たされなかった。ジーンだけならまだしも(?)そのコメントを活字にした僕までもが「大ウソツキ」になってしまったのだ。

'86年の来日が実現しそうにないとかだった時、正直なところ、僕の気持の80%は「アキラメ」の色に染まっていた。だってジーンは、「これまでのどの機会よりも、実現の可能性が高い」とまで言っていたのだから……。

その、残りの20%に賭けるような心境で、昨年12月、僕は再び渡米した。フィラデルフィアとニュージャージーで「CRAZY TOUR」のショウを観るために。そして「20%」を少しでも大きくむくらませるために……。

前年までのパターンと違い、「Detroit Rock City」ではなく「Love Gun」で幕を開けたそのステージは、「これ以上のものはあり得ない」と思わせた「ASYLUM TOUR」のスケールをも確実に上回っていた。勿論、ロック・バンドたるもの常にスケールアップし続けていたらわねは困るわけだが、彼らの場合、それが驚異的なくらいハイ・レベルなところで行なわれているわけで、15年以上ものキャリアを持ちながら、いまだに「ミュージシャンとして」の部分でも向上し続けているというのは、まさに信じ難いことだといえる。

「KISS Classics」とでもいうべき代表曲の数々に加え、最新アルバム「CRAZY NIGHTS」からは「Crazy Crazy Nights」「No. No. No.」「Reason To Live」そして「Bang Bang You」の4曲が披露され、いずれもコンサートのキー・ポイントなる箇所でも演奏されており、そんなことからも、彼らがこのアルバムにいかにか大きな自信を持っているかをうかがうことが出来た。特にブルースがキー・ボードを弾き、ポールがこれまで以上に感情豊かに歌いあげる「Reason To Live」、ブルースのギター・ソロをフィーチャーした「No. No. No.」は聴きモノだ。

そして、この時のインタビューでもジーンはこう言った。

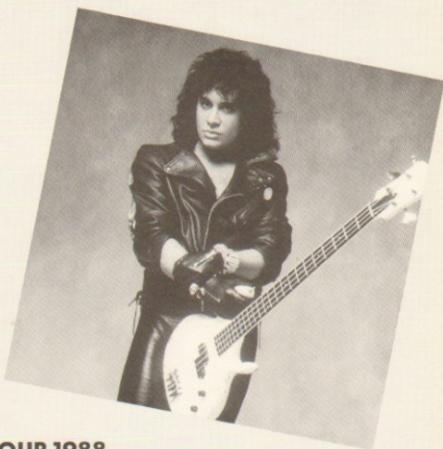
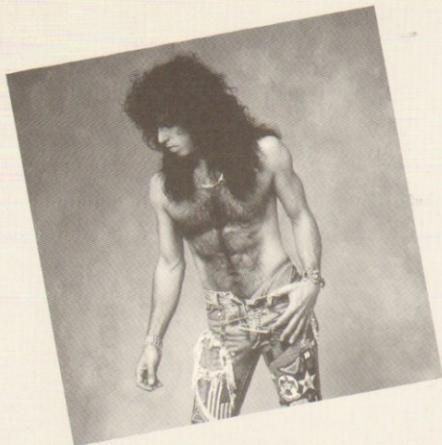
「来年は日本に行けようだよ」

ポールも同じことを言った。また、彼はこう付け加えた。

「キミ達が KISS を待っている以上に、僕達もみんなに会いたくてたまらないんだ」

「信じるの」と「期待するの」とは違う。半信半疑のままだったからこそ、10年ぶり3回目の来日決定には、本当に素直に驚いた。朝刊で「来日!」の文字を見つけた時、思わず「アッ」と大声をあげ、次の瞬間には、何をどうしていいものか、全く見当もつかなくなっていた。きっとそのままの精神状態で、僕は開演のベルを待つことになるのだろう。

でも、「夢の狂宴」が終りを告げ、放心状態につき落とされた僕、僕は一体どうなってしまうのだろうか。それを思うと今から不安でたまらないのだが……。

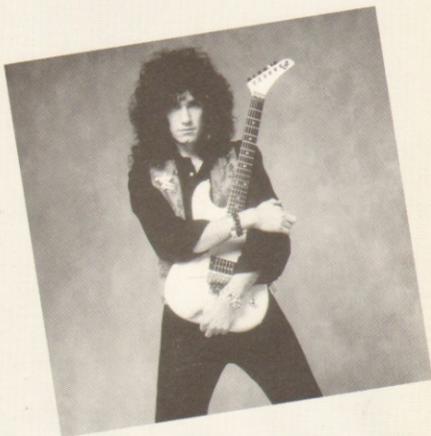


### **KISS JAPAN TOUR 1988**

**GENE SIMMONS: BASS , VOCALS**  
**PAUL STANLEY: GUITAR , VOCALS**  
**BRUCE KULICK: GUITAR**  
**ERIC CARR: DRUMS**

**STEVE HABL: PRODUCTION MANAGER**  
**MIKE RUSH: GUITAR TECHNICIAN**  
**TONY BYRD: GUITAR TECHNICIAN**  
**MARK HUGHES: SOUND ENGINEER**  
**JEFF DURLING: LIGHTING DIRECTOR**  
**MOE HAGGADONE: DRUM TECHNICIAN**

**PAUL MARSHALL: ATTORNEY**  
**SHELDON PLATT: ATTORNEY**  
**THEA KERMAN: ATTORNEY**  
**BOBBY BROOKS: BOOKING AGENT**



# KISS® CHIKARA



## 日本編集CDベスト

10年振りの栄冠を迎えて実現した日本独占企画!  
80年代の代表曲に70年代のKISS CLASSICS  
を加えたニュー・ベスト的CD!! 日本未発表の  
"ラヴィング・ユー・ベイビー"のロング・ヴァージョン等、  
4曲の日本未発表ヴァージョンを含む!!!

**「CHIKARA/パワー」**  
CD #P30R-20008 ¥3,000

**5/25 on sale**  
予約受付中!!

初回特典「スペシャル」⑦レールベルナ⑦ワッペン

Including: **ROCK AND ROLL ALL NITE/DETROIT ROCK CITY/LOVE GUN/I WAS MADE FOR LOVIN' YOU (Long Version)**  
**CREATURES OF THE NIGHT (New Mix)/ I LOVE IT LOUD (New Mix)/ WAR MACHINE (New Mix)/ LICK IT UP/ALL HELL'S BREAKIN' LOOSE**  
**HEAVEN'S ON FIRE/THRILLS IN THE NIGHT/WHO WANTS TO BE LONELY/UH! ALL NIGHT/TEARS ARE FALLING**

来日記念シングル「ターン・オン・ザ・ナイト」好評発売中 D07R-2010 ¥700 ●8cm CDシングル P10R-30001 ¥1,000

10年振り3度目の来日記念キャンペーン実施中!!!

キャンペーン期間中(3/20-6/20)にKISSの旧譜のLP、CD、カセットをお買い上げの先着100,000名様に最新カラーポスターをプレゼント!

 KISS LP: P30C-201 CD: P30C-20000	 HOTTER THAN HELL LP: P30C-202 CD: P30C-2000A	 DRESSED TO KILL LP: P30C-203 CD: P30C-2000B	 KISS ALIVE LP: P30C-203B-3 CD: P30C-2000C-7	 DESTROYER LP: P30C-204 CD: P30C-2000D	 ROCK AND ROLL OVER LP: P30C-205 CD: P30C-2000E		
 LOVE GUN LP: P30C-016 CD: P30C-2000F	 KISS ALIVE II LP: P30C-203B-1 CD: P30C-2000C-9	 DOUBLE PLATINUM LP: P30C-203B-3 CD: P30C-2000C-11	 KISS/PAUL STANLEY LP: P30C-207	 KISS/GENE SIMMONS LP: P30C-208	 KISS/ACE FREHLEY LP: P30C-209	 KISS/PETER CRISS LP: P30C-202	 DYNASTY LP: P30C-203 CD: P30C-2000G
 UNMASKED LP: P30C-203 CD: P30C-2000H	 Music from "THE ELDER" LP: P30C-203 CD: P30C-2000I	 KISS KILLERS LP: P30C-204 CD: P30C-2000J	 CREATURES OF THE NIGHT LP: P30C-205 CD: P30C-2000K	 LICK IT UP LP: P30C-206 CD: P30C-2000L	 ANIMALIZE LP: P30C-207 CD: P30C-2000M		



## ASYLUM

LP: P30R-2002 ¥3,300  
LP: P30R-2003 ¥3,300  
LP: P30R-2004 ¥3,300

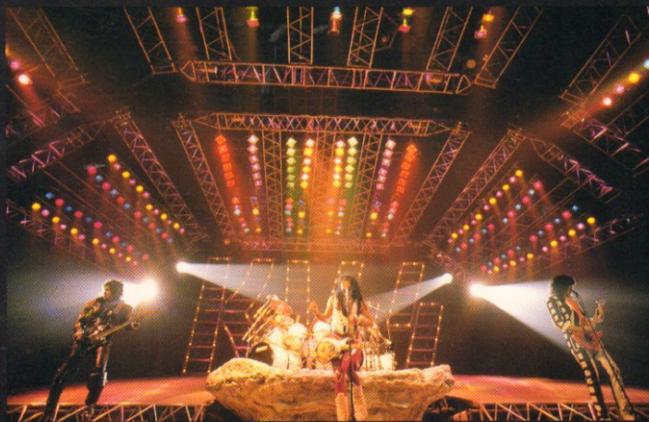
**CRAZY COLLECTION**  
**LP ¥1,950 · 2LP SET ¥3,200**  
**CD ¥3,300 2CD SET ¥5,800**

## CRAZY NIGHTS

LP: P30R-2006 ¥3,300  
LP: P30R-2004 ¥2,800  
LP: P30R-2004 ¥2,800



# KISS<sup>®</sup>



UDO  
ARTISTS, INC.

AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1988